

女子高校における歯肉炎をターゲットとした健康教育とその効果

○松岡奈保子¹⁾, 壺井一彰¹⁾, 西本美恵子¹⁾, 藤田孝一¹⁾, 中村譲治¹⁾, 藤好未陶²⁾
¹⁾NPO 法人ウェルビーイング, ²⁾福岡歯科大学口腔保健学講座

(索引用語: 健康教育, 歯肉炎, 女子高校)

口腔衛生会誌 55 (4), 2005

目的:

高校生時代の身体的な関心事は、男女交際を中心とした性に関する問題や、スタイルを気にしての拒食の問題が上位を占め、歯科保健に対する関心はほとんどない。そこで演者らは「歯肉炎」を生徒自身が取り組むべき健康課題と設定し、集団を対象とした歯科の健康教育に自己チェックシートを利用し、良好な結果を得たので報告する。

対象と方法:

対象は福岡県下S女子高等学校の2年生278名である。まず、体育館で2年生全員に学研制作の高校生の歯の健康シリーズ「高校生の歯と健康」(20分)のビデオをみてもらい、その後学校歯科医がパワー・ポイントで作った健康教育媒体(30枚)を使い30分間、歯肉炎や口の健康について講話を行った。

その後全員が教室にもどり自己チェックシートに上下前歯部の歯肉の状態について自分でチェック記録し、1週間後、前述の自己チェックシートで1週間前の歯肉と今回の歯肉を自分で比較判定してもらった。自己チェックシートは今回の健康教育の媒体として開発した。上下前歯部の歯間の歯肉の状態を○, △, ×の記号を用い自分で診断・記入し、さらに1週間後同じ部位を自分で診断し、前回の歯肉の状態と比較して効果を確認するという目的のために開発したものである。

評価は健康教育を実施した2年生時のベースラインデータと同群の3年生時の全体の歯肉炎の状況を比較した。さらに健康教育実施群と未実施群における2年生から3年生に渡る1年間の歯肉の状況の変化について分析を行った。分析は毎年5月に実施している学校検診のデータを活用し行った。歯肉炎の判定基準は下記の学校歯科検診基準を採用している。

0: 健康で問題のない歯肉

1: 出血, 歯間部に腫脹があり歯肉炎の症状がみられるが毎日のブラッシングによって改善ができるもの

2: 歯牙全周の腫脹, 歯石の沈着もみられ歯科医院での治療が必要と診断されるもの

結果:

表1, 表2, を参照

考察:

・染め出し等々を用いた歯磨き指導を実施しない集団対象の健康教育でも歯肉炎に対して十分な効果がえられた。

・集団への健康教育に加え自己チェックシートを取り入れたことで自分の問題として認識でき、しかも自分の歯磨きで歯肉炎が改善できるという自己効力感を持つことが示唆された。

・自分で自分の歯肉の状態を判断できるようになることで効果が継続した。

表1. 検診時に歯肉炎を持つ生徒の割合

	2年生時	3年生時
0	184名 (64.7%)	220名 (79.1%)
1	69名 (24.8%)	45名 (16.2%)
2	29名 (10.4%)	13名 (4.7%)

カイ二乗検定 $P=0.00051$ 統計的な有意差あり (0.1%)

表2. 健康教育実施群と未実施群の歯肉の変化

	未実施	実施
改善	20.0	22.3
現状維持	66.1	70.5
悪化	13.9	7.2

カイ二乗検定 $P=0.01212$ 統計的な有意差あり (5%)